

## 「第31回廃棄物資源循環研究発表会」 市民展示、ミニ発表会報告

第31回廃棄物資源循環学会研究発表会は、COVID-19の影響を受け、学会初めてのWeb開催となりました。2020年9月16～18日にWeb展示会場にて市民団体等12団体の活動が、一般公開で紹介されました。9月18日には、市民フォーラム「食品ロス」をテーマに消費者市民部会から、環境学習フォーラム「コロナ感染対策」をテーマに環境学習研究部会から発表されました。今回、市民展示からは、「ごみ減量実践活動ネットワーク(さっぽろスリムネット)」の活動を、環境学習フォーラムからは「さすてな京都」の発表をご紹介します。

### 第31回研究発表会

#### 市民・事業者・行政の連携でごみ減量を目指す枠組みの挑戦 「さっぽろスリムネット」15年の活動からみえたもの

ごみ減量実践活動ネットワーク委員長 **寺嶋 忠雄**

#### ■はじめに

市民・事業者・札幌市で構成される任意団体「ごみ減量実践活動ネットワーク(愛称:さっぽろスリムネット)」は、2021年3月で設立15周年を迎えました。2005年の設立当時を振り返ると、環境問題の解決を行政任せにするのではなく、市民や事業者が積極的に関わっていく必要性が論じられ、全国の自治体でパートナーシップ実現のためのさまざまな仕組み作りが進められた時期だったように記憶しています。

さっぽろスリムネットもそのような流れの中で誕生したわけですが、果たして、市民・事業者・行政の連携による枠組みは、この15年間、「ごみ減量」という目的に向かってどのような挑戦を行い、その結果何がみえたのか。簡単にお伝えしたいと思います。

#### ■資源回収から普及啓発まで幅広く

さっぽろスリムネットは、組織や事業を決定する機関として運営委員会を、具体

的実践活動を行う機関としてプロジェクトを設置しています(図1)。運営委員会は、12名の運営委員で構成され、商品の製造・流通・消費・回収・再生利用にかかわる事業者や、ごみ減量に取り組む市民が委員となっています。プロジェクトは、現在に至るまでさまざまなごみの減量・資源化の推進や普及啓発活動を実施してきました。事業例を挙げると、古紙・びん類・小物金属類・古布・小型家電の臨時回収拠点の設置、古着の移動回収、廃食油回収拠点設置支援、スーパーと協力したダンボール回収拠点づくり、生ごみ堆肥の拠点回収、生ごみリーダー養成講座、生ごみ堆肥化方法DVD制作、レジ袋削減啓発、オリジナルマイバッグ作成、リサイクル施設見学ツアー、家具廃材を利用した木工工作教室、おもちゃ交換会、ゲームで楽しく学ぶ環境教育出張講座、ごみ減量ポスターコンクール開催(写真1)などで、事業数は現在継続中のものを含めると60を超えます。

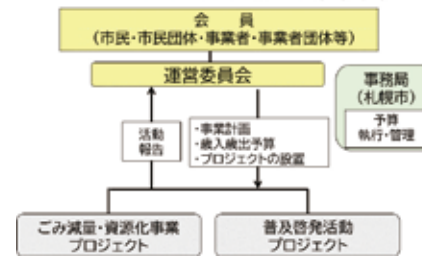


図1 さっぽろスリムネット組織図

#### ■市がさっぽろスリムネットの事業を採用

これまで展開してきた先駆的・実験的な事業のいくつかは、札幌市の事業として採用されています。たとえば、生ごみ堆肥化器材(コンポスター等)の購入助成、集団資源回収ボックスの設置助成、生ごみ堆肥化講師派遣、廃食油回収の普及啓発などです。

このように、さっぽろスリムネットは市のごみ減量施策に貢献する存在としての一面もあるわけですが、行政が採用したいと思う魅力ある事業モデルを生み出す力の源は、やはりパートナーシップにあるのではないかと考えます。行政だけでは出てこないようなアイデアはもちろん、決断の速さやネットワークの軽さによって、思い描いた事業を比較的短期間のうちに実現できる機動性の高さも、この団体の強みなのかもしれません。

#### ■最近の取り組みから

食品ロス問題について、2018年度から毎年10月に食品ロス削減講座を開催し、食品ロスに取り組む企業への見学会、フードバンク活動に携わる団体の講演会、参加者が各家庭で余った食材を持ち寄り創作料理を作る「Let's!サルベージ・パーティ®」(写真2)など、さまざまな角度からこの問題にアプローチしています。

また、海ごみ問題では、2019年2月に開催したさっぽろスリムネットフォーラムで海



写真1 第5回ごみ減量ポスターコンクール最優秀賞作品

岸漂着物の研究者を講師として招き、北海道沿岸に漂着するごみの実態を紹介しました。その後、啓発パネルも作成し、イベント、動物園、図書館などで展示を行なっています。

この他、ごみの減量につながる、行政だけでは取り組みづらい分野にも切り込んでいきます。たとえば、中学や高校の制服リユースを普及させるため、実験的に制服リユース活動を開始した団体への支援(広報等の協力)を行なっています。また、いわゆる遺品整理に伴って発生する一時多量ごみの問題が深刻化することを見据え、体も心も元気なうちに身の回りのものを減らしていく必要性についての啓発を、2021年2月に開催したフォーラムを機に進めていく予定です。

#### ■パートナーシップ型組織が発揮した力とは

パートナーシップ型組織は多くの期待を背負って誕生しました。さっぽろスリムネットはその中の一例に過ぎませんが、この15年をあらためて振り返ると、「多彩なアイディ



写真2 食品ロス削減講座のようす

ア」と「機動性の高さ」、「行政が取り組みづらいつ分野への積極的なアプローチ」を強みに数多くの事業を実現し、その一歩先をゆく活動が市のごみ減量施策にも貢献してきたことがわかります。

このような活動を15年間継続できた

のは、市民・事業者・行政が積極的にコミュニケーションを取り合い、互いに信頼関係を築くための努力を怠らなかったことにあります。今後も、パートナーシップを大切にしながら、新たな活動に挑戦し続けたいと考えています。

第31回研究発表会

新型コロナウイルスと環境学習施設

さすてな京都運営グループ

■はじめに

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症（新型コロナ）は、瞬く間に世界各地を襲いました。2020年3月にパンデミック（世界的大流行）が宣言され、人々の移動と活動の制限が行われるなど、医療・健康面のみならず、経済へも大きな影響を及ぼしました。環境問題に目を向けてみても、「使い捨てマスクの推奨（廃棄物の増加）」や「スーパーでの惣菜の取り分け販売中止（容器包装の増加）」など、新型コロナと共存する「新しい生活様式」を進める中で、私たちが命を守るために、一時的に選択せざるをえない環境への負荷も出てきました。

■オープンから臨時休館まで

「さすてな京都」は、オープン以降、団体見学や各プログラムへの参加で連日賑わい、3か月で約7千人の方に来館いただきました。そんな中、新型コロナが国内で蔓延しはじめました。徐々に感染者が増加し、京都府では2020年4月に緊急事態宣言が発表され、「さすてな京都」はその翌日から約1か月、臨時休館することになりました。

臨時休館の期間、来館者をお迎えないことは残念でしたが、各業務をレベルアップさせる期間として前向きに捉えられました。スタッフで共有したのは「『休館中業務』ではなく『再開館準備業務』である」ということです。当時は臨時休館がいつまで続くかわからない情勢でしたが、「常に来館者を迎え入れられる状態を維持し、再開館に向けて個人とチームをレベルアップしよう」とモチベーションを維持しました。たとえば、展示物の充実や新たな学習プログラムの検討、すべて中止となった小学4年生の社会科見学については、代替となる施設案内動画やワークシートを制作し、教育委員会事務局を通じて小学校に提供しました。臨時休館中に準備、制作したこれら成果は、現在も有効に活用されています。



写真1 コロナ禍により席を離しての講座開催

■新型コロナ対策（写真1、2）

6月の再開館以後、「さすてな京都」では、策定した「感染拡大予防ガイドライン」

◆京都市南部クリーンセンター環境学習施設

施設全景▶

京都市南部クリーンセンターは、「ごみ焼却施設」をはじめ、生ごみ等を発酵させて発生したメタンガスを活用する「バイオガス化施設」に加えて、大型ごみなどを破砕して、資源となる鉄やアルミを選別回収する「選別資源化施設」を併設した施設として、2019年10月に稼働を開始しました。最新のごみ処理設備を導入し、エネルギー回収の最大化を目指す、環境に配慮した施設です。ここに併設された環境学習施設が、「さすてな京都」です。3社で構成される「さすてな京都運営グループ」が、京都市から運営業務を受託しています（3社：（株）トータルメディア開発研究所、（公財）京都市環境保全活動推進協会、（株）かんでんジョイナス）。

「さすてな京都」は、「先進的環境教育活動を実践する施設（伏見ルネサンスプラン）」、「環境教育・学習の中核施設（京都市環境教育・学習基本指針）」として位置づけられています。ごみ処理に要する大規模施設を間近に見学し、環境技術を学んでいただけます。さらには、「ごみ減量」「地球温暖化」「生物多様性」「地域の歴史」等、幅広い分野を扱い、あらゆる世代が楽しく学べるライフステージに応じた学習プログラムを提供することを心がけています。「学びは楽しい」という認識のもとで、「学びから行動へ」と繋げられるような、知的探求心を引きつけるプログラムづくりを意識し、運営しています。



写真2 検温の様子

を常に見直しながら、来館者の皆さまが安心・安全に施設をご利用いただけるよう対策を講じています。「マスク着用」「ソーシャルディスタンス確保」「検温」「手指消毒」等を徹底することは、来館者だけではなく、施設で働くスタッフや、それぞれの家族や周りの大切な人の命を守ることにもなります。「コロナ対策をどこまで徹底して行うか」の議論は、いいかえると「自分と誰かの命を守るために対策をどこまで行うか」の議論にもなります。スタッフで対応できることにも限界があり、スタッフの世代や背景も異なりましたが、さまざまな来館者を想像しながら、何度も議論してルールを作っていました。

■新型コロナ対策と環境問題

新型コロナの対策については、専門家によっても、視点や立場によっても、意見が異なることがあります。「立場の違う者同士が集まり、誰もが納得する答えを探す」というテーマは、環境問題を考える中で非常に身近なものです。新型コロナ対策を考えることを通して、「自分の選択した行動が、自分と誰かの命にかかわるか

もしれない」という意識を強く実感する機会となりました。そして、自分と誰かの命の繋がりを意識することは、環境問題の原点であるとも気づかされました。

■おわりに

「環境問題」や「SDGs（持続可能な開発目標）」を考えると、ややもすると生活から離れた理念的で抽象的なテーマとして捉えがちです。貧困、飢餓、気候、自然、生物、差別…、関連する分野は幅広いですが、どの分野の課題解決にも必要とされる力が、「自分ごと」として課題を捉え、「自分以外の誰かの命を思いやる」という「共感する力」です。この環境学習施設は、身近な施設として親しまれるよう「さすてな京都」という愛称が名づけられました。その由来の一つが、「持続可能な」という意味をもつ「サステナブル」です。未来の「誰かの命にも寄り添う」ため、現在の私たちが持続可能な社会をつくる責任があることを、「さすてな京都」に来られる皆さまにもお伝えできればと思っています。コロナ禍での環境学習施設の運営は、「自分と誰かの心と向き合い、命の繋がりを意識する」ことの大切さについて、改めて考える機会になったと思っています。